

『紅一点論』

斎藤美奈子（著）／ビレッジセンター／1,700 円＋税／1998 年

わけ
理由ありのヒロイン像

坂田三允（長野県看護大学）

この書の副題は「アニメ・特撮・伝記のヒロイン像」。帯には、「『ナイチンゲール』は『ナウシカ』である。『キューリー夫人』は『セーラームーン』である。『ヘレン・ケラー』は『もののけ姫』である」と、伝記物語の愛読者が見たら怒り出しそうな過激な言葉が並ぶ。しかし、後期青年期に『宇宙戦艦ヤマト』に涙し、この年になってなお、孫と一緒に『セーラームーン』『キューティハニー』なんぞを楽しんでいるアニメ大好き人間の私としては、見逃すわけにはゆかない一冊なのだった。

しかし、この書は、アニメについて論じたものではない。アニメ・特撮・伝記のヒロイン像を通して見た現代日本社会論（？）なのである。構成は、「紅一点の国」「紅の勇者」「紅の偉人」の三部仕立て。それぞれ、「戦後の子どもメディアが一貫して提供してきた女性像」とその背景、アニメ作品でのヒロインの描かれ方、子ども向けの伝記物語に取り上げられている女性の偉人たちの描かれ方、が検証される。いいかえれば、女性は社会（もしくは男性）からどのように見られてきたのかという視点で、アニメ・特撮・伝記を分析したものが本書である。そして現代の「世界は『たくさんの男性と少しの女性』でできている」と結論づけている。

「アニメの国には、二つの文化圏が存在する。『男の子の国』と『女の子の国』である。（略）戦後の日本の子ども文化はなにかと男女別枠で運営されてきた。男の子の国は軍事大国であり、女の子の国は恋愛立国である。そして著者は、このアニメの国を「大人社会の縮図＝模型」と評

する。「女の子の国」のヒロインは父親から見た理想の娘であり、一方、「男の子の国」の正義の味方チームに必ずまじっている紅一点の女性隊員の仕事は通信係（電話番号と雑用）とお色気サービスである。また「子ども向けの伝記は現代のアニメに似る。（略）歴史的に重要な人物でも、みんな『偉人』になれるわけではない。子ども向けの伝記シリーズに『ヒットラー伝』はありえない。偉人＝偉い人とは子どもの手本になる人物でなければならないのだ。伝記の人物とは、アニメの主人公と同じ『正義の味方』なのである」。

そして、ジャンヌ・ダルクこそは紅一点の元祖なのだという。青年期に私が涙した『ヤマト』の女性キャラクターは「自国の存亡を担っているにしては色恋ボケである」と切り捨てられ、「この程度の単純な女性観が、当時の単細胞なアニメ・ファンのレベルにはぴったりだったのであろう」とまでいわれると、いささかムツとはするが、そういう視点で見れば確かにそうだと思うなくもない。

いずれにせよ「萬緑叢中紅一点は、けっして健全な状況ではない。（略）緑全部、萬緑叢中紅一点、緑紅半々、萬紅叢中緑一点、紅全部…。さまざまな男女比の組織やチームが当たり前存在するようになったとき、はじめて私たちは男女比などという些末事にわずらわされなくなるだろう」という著者の言葉は、十分に納得できる。男と女は明らかに異なる性を有しているが、それがその人の持つ最大の特質、あるいは資質であると思われるのではないだろう。 ▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。